

# IDDNewsletter..... 2

February  
2026



専攻科棟四階情報デザイン科図書室

特集

## 聾者との出会いと その後の手話の学習を振り返る

今の私を振り返ると、一体どこから始まったのだろうと不思議な気持ちになる。なぜ手話を身に付けようとしたのか。相手も自分も楽しく通じ合えたらそれでバッチリ！ただそれだけだった。

## 特集

# 聾者との出会いと その後の手話の学習を振り返る

今の私を振り返ると、一体どこから始まったのだろうと不思議な気持ちになる。なぜ手話を身に付けようとしたのか。相手も自分も楽しく通じ合えたらそれでバッチリ！ただそれだけだった。

私が最初に出会った耳の聞こえない人（当時はそのような認識だった）は、内地（主に北海道以外の日本）から釧路という町に来ていた漁師さんだった。

父が脳内出血で倒れ、当時の私は絵に描いたような苦学生で、夕方から夜に掛けてアルバイトを頑張っていた。そこにお客様として来店したのが彼だった。彼は手話は使わず、筆談でコミュニケーションを取っていた（おそらく手話ができなかった私達に合わせてくれたと推測される）。とても明るい人で、音楽に合っているとかが合っていないとかお構いなしに『踊ろうよ！』とダンスに誘っては出鱈目なジルバを楽しんでいた。どのように接したら良いのか見当も付かず、おそらく私はかなりギクシャクしていたのだと思う。ロボットのように固まっている私を気にする様子もなく、その人は陽に焼けた顔に白い歯をのぞかせて、常に笑顔だった。思えばあの時が「私に手話の知識があれば…」という気持ちの芽生えだったと思う。彼はコミュニケーションを楽しみに来ているのに、私がもたもたと文字を書いているから会話の勢いのようなものが削られる。もっと面白い話をテンポ良く伝えたいのにできない。伝えたいのに伝わらないもどかしさを実にはっきりと体



専攻科：油壺の棚



専攻科：乾いた粘土の再生過程

感した。外国の方が来たら日本人スタッフが片言の英語で対応する、あるいは外国人スタッフと交代するのだが、聾者のお客様の場合は誰も手話ができない為、筆談に落ち着いてしまう。なんだか彼に申し訳ないような気持ちになってしまったのを憶えている。

次に聾者に出会ったのは真夏の横浜西口バスターミナルだった。小学校高学年くらいの女子2人だった。バス停の脇にあるバーに腰掛けて、手話で楽しく会話をしていた。その様子から『ここに座っていても大丈夫かな？』と、一人がもう一人の少女に話しているように見て取れたが私はまだ手話が分からないままだったので、失礼に

当たらない程度に彼女たちのやり取りを見ていただけであった。私は、手話に興味もあり、何となく彼女たちに話しかけたかったのだが絶対に不審な人だと思われると考え直し断念した。そもそも手話が分からないのに、バス停でたまたま出会った少女達に何と言って、更にはどのようにして話しかけたらいいものか？そんなことは音声日本語でもめったにしないことである。無理ゲー過ぎである。



専攻科：サンダー用替え芯とロール

3度目に出会った聾者は室蘭養護学校高等部の生徒だった。担当した生徒の中に、完全に聾の生徒がいた。彼女とは、面白いエピソードがたくさんできた。少し手話を覚えた私と彼女は、全校朝会で『校長先生の話が長いね～』『もう終わればいい…』などと秘密の会話を楽しんだ。そろそろ補聴器の電池を取り替えようよと私が促すと『聞こえるよ』と言うので、試しに電池を入れないで補聴器を渡すと『聞こえる』と言うし、新しい電池を入れても『聞こえる』と言う、補聴器は壊れてはいなかったの、何だかよく分からなかった。けれど彼女の言語はやはり手話なのだということが分かった。

彼女との出会いと、そしてそこからの衝突と爆笑の出来事が、自分は手話をもっと使えるようになって、もっともっと楽しい会話をしたいという欲に繋がった。彼女とのやり取りが決定打になって、今の私になることを決めたのである。

当時はインターネットもまだ一般的ではなく、本を買って自分で勉強するしかなかった。サークルがあるということも知らず、ひたすら本に描いてあるイラストを頼りに、真似て表現してみるという勉強方法だった。

4度目に出会った聾者は江別の手話サークルに来ていた年配の聾者二人だった。見学で来ていた私に、手話単語をいくつか教えてくれた。ただの見学者の私に熱心に教えてくださった。『初めて会った人でも、手話を憶えたいという人には『とにかくご飯に置こう！』と誘うの。』と笑っておっしゃっていた。相手が手話一つもできなくてもとにかく日常の場面を共に過ごす。それこそが近道なのだと彼女は言っていた。その時の私は、大人の聾者と話した経験が無かったが、彼女の手話と表情とCL(その場の状況を豊かに表現するための、空間・形態描写の手法)で何を話しているのかが理解できた。この時に、手話とは手の動きだけではなく、顔や身体の動きのタイミングなども重要であることが分かった。

そして手話の力が飛躍的に伸びたのは札幌と小樽に来てからだった。当時中学2年生の聾の女子と毎日繰り広げられる2年間のコントの様な会話と、当時専攻科1年生女子2名との2年間の女子トークで、語彙も表現の幅も格段に上がった。小樽の職場には身近に聾の職員もおり、分からないことは直ぐに質問することができた。いろいろな聾の職員に質問した経験があるが、皆総じて親切に教えてくれる『自分で調べろ』とか『そんなの教えない』と突き放す人は一人もいなかった。「こんな初歩的なことをきいたら恥ずかしいかも」とか「たいして親しくもないのにこんな質問は迷惑かも」等という思いはたいていの場合杞憂である。人は何度でも忘れるし、何度でも間違えるのだから、思い切って元気良く質問したら良いのである。

時代と共に言語も変わる、どれだけ勉強しても『もう充分』ということは無いはずだ。数十年の年月を振り返って感じることは、人との面白い会話こそが語学上達の鍵であったということである。豪快に表現してまんまと間違っただけ『それ違うよ』と言ってもらうこと「あ、間違っちゃった！」で済ませて、会話に臆病にならないこと『話したい』という欲を押し過ぎないこと、私はまだまだ面白い会話がしたい。特別なことではなく手話ができるだけのその辺の人になりたい。今の私の目標は、その辺に当然のようにうろついている、手話のできるありふれた道民Aとして元気に暮らすことだ。

IDDN

# Contents

特集

## 聾者との出会いと その後の手話の学習を振り返る

今の私を振り返ると、一体どこから始まったのだろうと不思議な気持ちになる。なぜ手話を身に付けようとしたのか。相手も自分も楽しく通じ合えたらそれでバッチリ！ただそれだけだった。

表紙写真：専攻科棟四階情報デザイン科図書室

Welcome to Information Design Department !!

## 入学生を募集しています！

北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科は、聴覚障害のある方で、高等学校や、特別支援学校高等部を卒業等していれば、入学できます。それ以外の年齢制限や条件はありません。道外の方でも入学できます。昼食は給食を利用でき<sup>(注1)</sup>り、希望があれば、寄宿舎に入ることもできます<sup>(注2)</sup>。

※入学条件の詳細は、下記アドレス専攻科情報デザイン科 Web ページ内の「入学者募集」をご覧ください。

### 専攻科情報デザイン科 Web ページ

[http://www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp/?page\\_id=228](http://www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=228)

### 入学者募集について

[http://www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp/?page\\_id=223](http://www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp/?page_id=223)

## 入学に関するお問い合わせ

ファックス：0134-62-2663

電子メール：koutourou-z0@hokkaido-c.ed.jp

電話：0134-62-2624

注1：1食400円（昼食）で、就学奨励費の対象となっています。注2：学年末・学年始休業日、夏季・冬季休業日は閉舎します。注3：現在、学校で材料費等は徴収していません。授業毎に使用する材料等は、すべて学生自身で準備し、学校に持参していただきます。注4：特別支援学校に在籍する生徒・学生への補助制度で、帰省や通学にかかる交通費、給食費等が対象となり、所得状況に応じて額は変わります。注5：普通校には通常ない領域で、障害そのものの改善に焦点を当てます。具体的には、昇校の場合、聞こえや社会生活、コミュニケーションに係わる内容となり、学校の教育活動全般をとおして行われます。注6：医療や教育分野では聴力を基準に考えることが多いですが、聴覚障がい者の実際の社会での有り様においては、日本手話を母語とする「ろう者」と聞こえづらいついけれども日本語を母語とする「難聴者・中途失聴者」で分かります。

情報デザイン科学科だより

Information Design Department

# IDDNewsletter

February 2026 2

IDDNewsletter February 2026

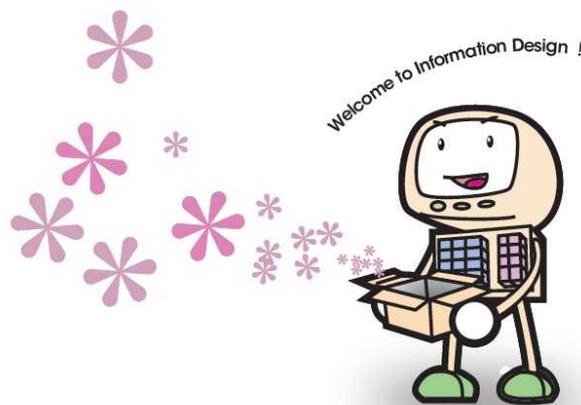
発行人／北海道高等聾学校専攻科情報デザイン科「学科だより」編集チーム

発行／北海道高等聾学校

〒041-0261 北海道小樽市銭函1丁目5-1

[www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp](http://www.koutourou.hokkaido-c.ed.jp)

※ ご意見、ご要望などにつきましては、上記 Web ページより電子メールでご連絡ください。



Copyright 2000/2015 Kozue MORIAI/Hokkaido high school for the Deaf

## 専攻科情報デザイン科の特徴

- ・高等学校に設置される「専攻科」と同様の枠組みです。（いわゆる「準ずる教育」の教育課程です）
- ・授業料が全くかからず、材料費等も非常に低コスト<sup>(注3)</sup>で、対費用効果の高い学習内容を学ぶことができます。また、通学等に関わる費用は「就学奨励費」の対象<sup>(注4)</sup>となっており、支援制度等も充実しています。
- ・DTPやWebに係わる「最新の」「スタンダード」な内容を重視します。（例えば、Webであれば、HTML5とCSS3を使い、セマンティックなコーディング、というように。もちろんテーブルレイアウトやcenterタグは使いません！）
- ・デザイン等に専門的な学習だけではなく、特別支援学校における「自立活動」<sup>(注5)</sup>で扱うべき内容、例えば日本語教育や聴者社会の社会生活に係わる内容等を、総合的に、到達度がはっきり理解できるように学びます。
- ・学生のこれまでの学びの環境や積み重ね（「普通校」出身者か「聾学校」出身者か、失聴時期、日本語のリテラシー、学力等）に合わせた教育方法を準備します。
- ・筑波技術大学と協調した授業等も行っています。
- ・修了後について、本人、保護者の希望をお聞きすると同時に、ロールモデルとなる聴覚障がい教職員のアドバイスをを受けたり、聴者社会とろう者社会、ろう者と難聴者との違い<sup>(注6)</sup>などについて客観的に学びながら、単に「好きなこと」から「(社会にとって、自分にとって)やる価値のあること」「自分の技量でできること」「社会に貢献できること」といった観点から主体的に選択できるようにしていきます。